

中学校教員のダンスに対する ジェンダー・イメージ, 抵抗感と羞恥心

— A市公立中学校保健体育教員を対象として —

酒向 治子 ・ 平田麻里子* ・ 猪崎 弥生**

本研究では, 地方都市A市内公立中学校保健体育科教員を対象として, ダンスのジェンダー・イメージ (男らしさ/女らしさ), ダンスに対する態度 (抵抗感と羞恥心 [恥ずかしさ]) に関する質問紙調査を行い, 実状を把握することを試みた。その結果, ①ジェンダー・バイアスについては未だ根強く残っており, 種目 (領域) 別にみると「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあることが明らかとなった。また, ②抵抗感や羞恥心については, 抵抗感や羞恥心ともに中立化の傾向を示したものの, 未だ抵抗感や羞恥心を抱く教員が多いことが明らかとなった。

Keywords : ダンス, 舞踊教育, ジェンダー・イメージ, 羞恥心, 抵抗感

1. 研究背景および目的

平成24年の中学校1・2年生のダンスの必修化を受けて, ダンスの授業内容や指導法を検討するために, 教員と生徒のダンスに対する意識を明らかにすることは重要な課題として浮上した。本研究者らはこうした認識のもと, 教員と生徒の両方を対象にダンスに対する意識調査を2011年より継続的に行ってきた。

上記の意識調査を行なっていく前提として, 本研究では主に以下二つの問いを設定した。

①一つ目は, ダンス自体はこれまで「女性的なもの」として語られる傾向にあったが, 「このイメージが2011年以降どうなっているのだろうか」という問い。

②二つ目は, ダンスに対する抵抗感や羞恥心とジェンダー・イメージとの関連について。

表現運動・ダンスは他の体育領域に比べて指導しにくいという, 教員のダンスへの抵抗感を示す意識調査結果は, これまでいくつか発表されてきた。ダンスに対する「恥ずかしさ」(本研究では「羞恥心」

とする)については, 「恥ずかしいと構えてしまって, なんとなく敷居が高いように感じる」(渡辺 2009) というような語りが繰り返されてきたものの, 学術研究は非常に限られている状況にあった。さらに秋葉 (1982) の「ダンスは女性的であるという偏ったイメージがダンスへの抵抗感を生み出している」という言説に見られるように, ダンスへの抵抗感はダンスのジェンダー・イメージと結びつけて語られてきた傾向にあった。これらを受けて, 2011年以降「教員はダンスに対して抵抗感や羞恥心をどの程度抱いているのか, そしてダンスのジェンダー・イメージとの関連はあるのか」を二つ目の問いとした。

これまで本研究者らが行ってきた調査のうち, 中学生を対象に行なった意識調査の研究結果を総合すると, 中学生あまりダンスを「女らしい」ものと見なしておらず, どちらかと問われると「女らしい」に傾きがちではあるものの, 「男らしい」というイメージも生じつつあり, そのジェンダー・イメージ

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

* 共立女子大学 101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1

** お茶の水女子大学 112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Junior High School Teachers' Gender Image, Negative Feelings and Embarrassment toward Dance

Haruko SAKO, Mariko HIRATA*, and Yayoi IZAKI**

Division of Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Kyoritsu Women's University, 2-2-1 Hitotsubashi Chiyoda-ku, Tokyo 101-8437

**Ochanomizu University, 2-1-1 Otsuka Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

は変容しつつあるのが実状と考えられた。また、抵抗感や羞恥心といった負の感情は根強く見られるものの、ジェンダー・イメージとの関連は強く見られなかった。

一方で、教員を対象にした調査について、小学校教員を対象にしたものと、中学校教員を対象としたものがある。いずれも「ダンスは女らしいもの」という根強いジェンダー・イメージ、そして抵抗感や羞恥心抱いていることが示唆された。しかし、これまで行なった中学校教員を対象としたジェンダー・イメージの調査は小規模のものであり、また中学校教員の男女双方を対象とした抵抗感や羞恥心、そしてジェンダー・イメージとの関連をみる調査はこれまで行なっておらず、課題として浮上していた。そこで本研究では、中学校教員を対象として、①ダンスに対するジェンダー・イメージ、②ダンスに対する態度（抵抗感と羞恥心）についての質問紙調査を行い、考察を行う。このことを通して、ダンス教材や指導法開発の土台となる基礎的資料を得る事を目的とする。

2. 研究方法

- ①研究期間：2016年9月2日～2016年9月30日
 - ②研究対象：地方都市A市内公立中学校保健体育科教員
 - ③個人情報保護に対する説明：調査票の冒頭に、回答結果は研究に利用するのみで、他の目的に使用しないこと、回答結果は全て統計的に処理し、プライバシーが漏れることがないことを明記した。
 - ④質問紙調査：郵送法による回収（総数135部配布、70部回収；回収率51.9%）
- 主な質問内容：次の項目の5件法による調査①主要なスポーツ12種目（陸上・サッカー・柔道・ソフトボール・バスケットボール・ダンス・バドミントン・器械運動・バレーボール・水泳・野球・剣道）のジェンダー・イメージ、およびダンス種目（「創作ダンス」・「フォークダンス」・「現代的なリズムのダンス」）に対するジェンダー・イメージ、②ダンスを指導することに対する抵抗感、③ダンスをすることに対する羞恥心

表1 回答者の内訳

	年齢					教員歴			
	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	1～9年	10～19年	20～29年	30年以上
女性 n=19	6(31.6%)	3(15.8%)	5(26.3%)	5(26.5%)	0(0.0%)	7(36.8%)	4(21.1%)	3(15.8%)	5(26.3%)
男性 n=41	6(14.6%)	13(31.7%)	10(24.4%)	11(26.8%)	1(2.4%)	12(29.3%)	12(29.3%)	11(26.8%)	6(14.6%)
全体 n=60	12(20.0%)	16(26.7%)	15(25.0%)	16(26.7%)	1(1.7%)	19(31.7%)	16(26.7%)	14(23.3%)	11(18.3%)

表2 スポーツに対するイメージと男女差の検討

	女性(n=19)		女性(n=41)		t値	全体(n=60)	
	平均	SD	平均	SD		平均	SD
陸上競技	3.05	.23	3.27	.55	.14*	3.20	.48
サッカー	3.79	.79	3.80	.75	.07	3.80	.75
柔道	3.47	.70	3.68	.76	.02	3.62	.74
ソフトボール	2.53	.91	2.54	.81	.04	2.53	.83
バスケットボール	3.00	.00	3.05	.44	.48	3.03	.37
ダンス	2.16	.84	2.10	.70	.29	2.12	.74
バドミントン	2.84	.50	2.80	.40	.31	2.82	.43
器械運動	3.05	.52	2.93	.61	.78	2.97	.58
バレーボール	3.00	.33	2.63	.62	.96	2.75	.57
水泳	3.00	.00	3.00	.22	.00	3.00	.18
野球	4.16	1.01	4.20	.87	.15**	4.28	.91
剣道	3.32	.58	3.22	.57	.60	3.25	.57

*p<.05, **p<.01

3. 研究結果

3-1. ダンスを含む主要なスポーツ12種目のジェンダー・イメージについて

以下の表は、主要なスポーツ12種目（陸上・サッカー・柔道・ソフトボール・バスケットボール・ダンス・バドミントン・器械運動・バレーボール・水泳・野球・剣道）のについて、ジェンダー・イメージ（「女らしい」「どちらかといえば女らしい」「どちらでもない」「どちらかといえば男らしい」「男らしい」）を5件法でたずねて「女らしい」を1点、「どちらかといえば女らしい」を2点、「どちらでもない」を3点、「どちらかといえば男らしい」を4点、「男

らしい」を5点として平均値を算出し、男女別及び全体をまとめたものである。

全体の平均値をみると中立化傾向の種目が大半を占めるが、サッカー、野球、柔道、剣道の四種目が「男らしい」イメージよりであり、ダンスが「女らしい」イメージよりといえる。性差についてt検定を行ったところ、「陸上競技」と「野球」に5%水準で男女差が認められた。逆に言えば、「ダンス」を含めその他10種目については男女差が見られないという結果であった。「陸上競技」と「野球」の種目を度数の割合で可視化したものが、以下の図である。

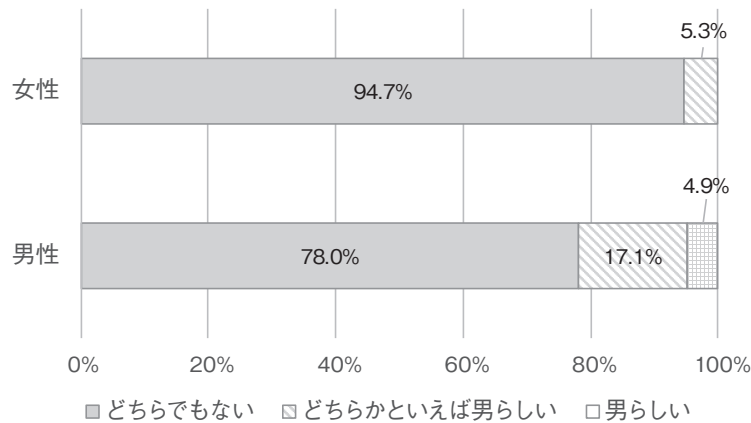


図1-1 陸上競技に対するイメージ（男女差あり）

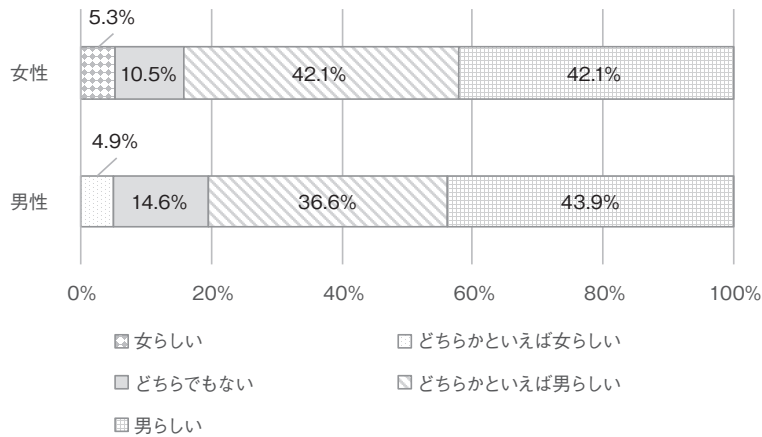


図1-2 野球に対するイメージ（男女差あり）

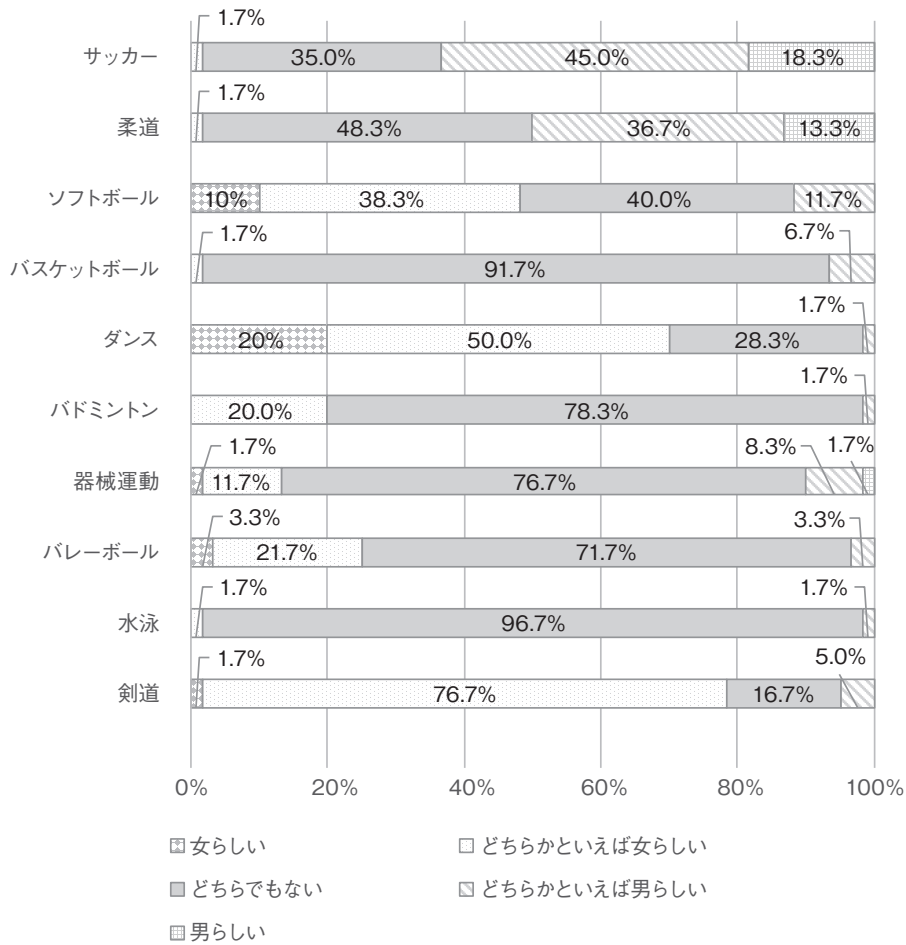


図2. スポーツに対するイメージ (男女差なし)

「ソフトボール」は平均値でみると2.53と「どちらでもない」の範囲に収まるものの、同数の割合をみると「女らしい」10%、「どちらかといえば女らしい」38.3%を合わせると、約半数の48.3%が女性的なイメージを抱いていることがわかる。さらに、「ダンス」は「女らしい20%」と「どちらかといえば女らしい52.7%」を合わせると72.7%が女性的なイメージを抱いているといえる。これは、従来の「ダンス＝女性らしさ」のイメージが根強く残っていることを、あらためて示唆していると考えられる。

3-2. ダンス三種目のジェンダー・イメージ

既述のとおり、ダンスのジェンダー・イメージは全体では女性的といえる。ダンスの三種目（「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」）別にみたところ、平均値が「創作ダンス」2.42、「フォークダンス」2.88、「リズムダンス」2.92であり、創作ダンスが「やや女らしい」よりであり、フォークダンスとリズムダンスは「どちらでもない」の範囲に収まっていると考えられる。このことは、ダンスの三種目の中でも、特に「創作ダンス」が女性らしいと思われる傾向にあることを示唆している。以下は度数の全体に占める割合をグラフ化したものである。

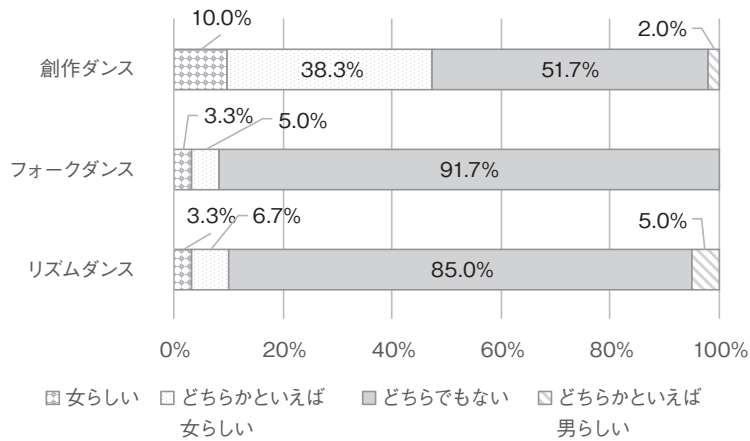


図3 ダンス3種目に対するイメージ

4. ダンスに対する態度（抵抗感と羞恥心）とジェンダー・イメージとの関連について

4-1 ダンスを指導することへの抵抗感について

「ダンスを指導することへの抵抗感」についてであるが、「抵抗はない1点」, 「どちらかといえば抵抗はない2点」, 「どちらでもない3点」, 「どちらかといえば抵抗がある4点」, 「抵抗がある5点」と、各項目を得点化し、平均値を算出したところ、全体は2.98, 「どちらでもない」の範囲におさまるもの

でした。一方で、より詳細に度数の割合をみると、抵抗感を抱いている割合（「抵抗がある23.3%」「どちらかといえば抵抗がある16.7%」の合計）が全体の40%を占めていることから、抵抗感も未だ根強いということも言える。

また、ダンス三種目のジェンダー・イメージと「抵抗感」の相関をみたところ、相関は認められなかった。さらに、「創作ダンス」のみが5%水準で、負の相関を示した。

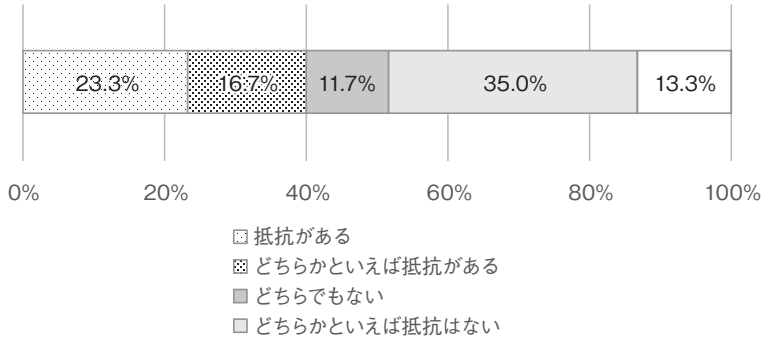


図4 ダンスに対する抵抗感

4-2 ダンスを指導することへの羞恥心について

「羞恥心を感じない1点」, 「どちらかといえば羞恥心を感じない2点」, 「どちらでもない3点」, 「どちらかといえば羞恥心を感じる4点」, 「羞恥心を感じる5点」と、各項目を得点化し平均値を算出したところ、全体は2.93, 「どちらでもない」の範囲におさまるものでした。方で、より詳細に度数の割合をみると、羞恥心を感じている割合（「羞恥心を感じる10%」「どちらかといえば羞恥心を感じる25%」の合計）が全体の35%を占めていた。羞恥心を感じ

じていない割合（「羞恥心を感じない16.7%」「どちらかといえば羞恥心を感じない18.3%」の合計）が全体の35%で、羞恥心を感じている割合と同じことから、抵抗感と同様に、羞恥心も未だ根強いということも言える。また、ダンス（全体）と羞恥心の相関をみたところ、相関は認められなかった。さらに、ダンス三種目のジェンダー・イメージと「羞恥心」の相関をみたところ、「創作ダンス」と「現代的なリズムのダンス」が1%水準で、羞恥心との有意な負の相関を示した。

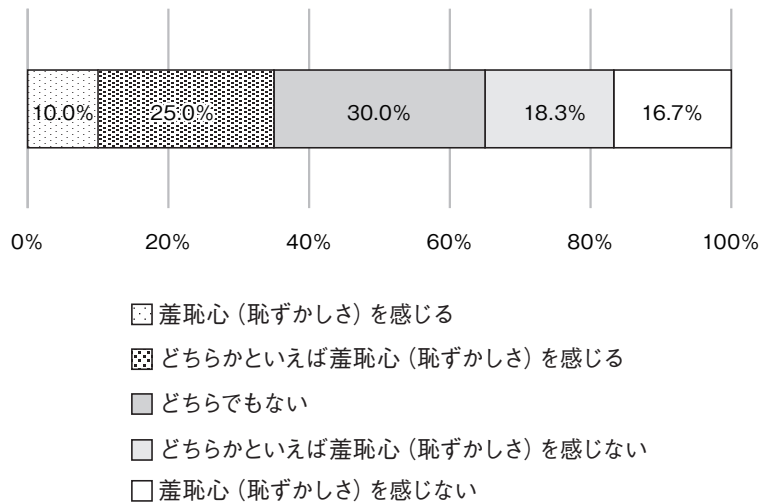


図5 ダンスに対する羞恥心

5. 調査のまとめ (議論)

(1) スポーツのジェンダー・イメージ

スポーツのジェンダー・イメージを調査した山本(2007)の先行研究では、男性的イメージがある種目として野外種目、武道種目、体闘型、投擲種目、女性的イメージがある種目としてネット型球技種目、表現採点種を挙げている。本調査の結果では、男性的イメージの数値が高いのは、サッカー、野球、柔道、武道であり、女性的イメージの数値が高かったのはダンスであった。ネット型球技種目であるバドミントン、バレーボールの平均値はそれぞれ2.82、2.75と「どちらでもない」の範囲に収まるものではあった。しかし度数の割合をみると、本調査で女性的イメージの数値(「女らしい」と「どちらかといえば女らしい」の合計)が20%を超えたのが12種目のうち4種目であり、その内の2つがネット型球技種目であるバドミントン(「女らしい0%」「どちらかといえば女らしい20%」:合計20%)とバレーボール(「女らしい3.3%」「どちらかといえば女らしい21.7%」:合計25%)ということになった(他の2種目はソフトボール合計48.3%,ダンス合計70%)。これらの結果は、山本の調査結果と同様の傾向を示していると考えられる。

(2) ダンスのジェンダー・イメージ

ダンスのジェンダー・イメージについては、以下の点が明らかになった。

- ①ダンス全体では、(男女双方の)教員に、女性的というイメージが根強く残る。
- ②ダンスの種目(領域)別では、「フォークダンス」「リズムダンス」に対するジェンダー・イメージは中立化傾向にあるものの、「創作ダンス」に特に女

性的なイメージが残っている。

(3) 抵抗感と羞恥心

ダンスへの態度(抵抗感と羞恥心)については、以下の点が明らかになった。

- ①抗感と羞恥心ともに(男女双方の)教員が「どちらでもない」の中立化傾向を示していた。
- ②ダンスの種目(領域)別では、抵抗感・羞恥心ともに相関を示したのは「創作ダンス」であった。今後の学校現場や、教員養成課程において「創作ダンス」(表現系のダンス)をどのように指導してくかが課題として浮上した。

6. 今後の課題

本稿の最後に、本研究の限界と今後の課題を記しておきたい。本研究では、質問紙調査の中で、教員の性別や年齢など基本的な属性のみ尋ねており、教員のダンスの学習経験について十分なデータをとっていない。しかし、ダンスへのイメージや態度は、教員のそれまでのダンス経験によって変容する可能性が高い¹⁾。今後は、過去の授業経験、教員養成課程でのダンス学習の経験や教師になってからのダンス指導経験との関連でより掘り下げた検討をする必要があるだろう。

[付記] 本研究は、科研費(課題番号:16K02037)の助成を受けたものである。本調査に際し、快くご協力を賜りました諸先生方のご厚意に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 2016年日本スポーツとジェンダー学会から出

版された『データでみるスポーツとジェンダー』の第5章には、高校体育授業で経験したスポーツ種目の単元数として、男子が女子に比べて多く経験している種目にサッカー、柔道、剣道、男女差が少ない種目として、水泳、バスケットボール、陸上競技、(本研究調査項目にはないが)集団行動、卓球、持久走、女子が男子に比べて多く経験している種目で特に顕著なのがダンスであり、他にはバドミントン、テニス、バレーボールが挙げられていた。この結果を照らすと、学校での授業経験とジェンダー・イメージに強い関連がある可能性が考えられる。

参考文献

- 秋葉尋子(1982)子どもがまったく興味を示さない、特に恥ずかしくてやらない子が多いのだが・体育科教育 30(6):50-52.
- 安藤幸・岡田晶子(2003)徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点-1991年と2001年の表現運動指導の比較を通して-。鳴門教育大学実技教育研究 13:53-65.
- 猪崎弥生・永田麻里子・酒向治子(2012)大学生はダンスにおける「男らしさ」「女らしさ」をどのように捉えているか-質問紙調査に基づく検討-。スポーツとジェンダー研究 10:16-22.
- 猪崎弥生・酒向治子・永田麻里・永田麻里子・田中俊之・米谷淳(2013)中学校のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価:質問紙調査を基に。お茶の水女子大学人文科学研究9:15-24.
- 猪崎弥生・酒向治子・米谷淳(2015)ダンスとジェンダー-多様性ある身体性-。一二三書房
- 酒向治子・永田麻里子・出原智波・角南順子・猪崎弥生(2013a)教員と中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 152:45-49.
- 酒向治子・永田麻里・出原智波・猪崎弥生(2013b)中学生のダンスに対するイメージ-男女差の検討一。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 153:97-101.
- 酒向治子・永田麻里・出原智波・山口順子・猪崎弥生(2013c)中学生のダンスに対するジェンダー・バイアス。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 154:73-77.
- 酒向治子・永田麻里子・猪崎弥生(2014)中学校女性体育教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心について。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 155:109-113.
- 酒向治子・平田麻里子・猪崎弥生(2017)小学校教員のダンスに対するジェンダー・イメージ、抵抗感と羞恥心について。岡山大学大学院教育学研究科研究集録 164:85-90.
- 寺山由美(2007)「表現運動」を指導する際の困難さについて-千葉県小学校教員の調査から-。千葉大学教育学部研究紀要。55:179-185.
- 日本スポーツジェンダー学会(2016)データでみるスポーツとジェンダー。八千代出版.
- 森清・阿部正臣・梶原洋子・メ木一郎(1981)小学校助教諭の体力・技能と教科体育への意識(第5報)。-表現運動の指導の実態とその意識を中心として-。文教大学教育学部紀要 15:35-48.
- 山本教人(2007)スポーツのジェンダー適性とメディア・イメージに関する研究。
<http://www.noriyam.atnifty.com/~home/noriyam/works/genderimg.pdf>